

① 雨上がり
② 八百
③ 一見

④ どぼく
⑤ ひばな

② ア
① ひとりごと

③ イ
④ 花の

⑤ ア
⑥ ウ

③ イ
① ウ
② エ
④ ア
⑤ カ
⑥ オ

④ ゆうえき
① イ
② エ

③ かんきょうおせん

④ ア
⑤ ウ

配点	
①	各2点×5=10点
②~④	各5点×18=90点
<計>100点	

①「雨」の中の四つの点の向きに気をつけよう。②「うそ八百」は「たくさんのおそ」である。「八百」は「たくさん」という意味になることが多い。「八百屋」「八百万の神」などもそうである。③「一見」は「ちらっと見ること」で、「百聞は一見にしかず（何度も聞くより、一度じっくり自分に自分の目で見ると方がよい）」ということわざもある。④「土木工事」は「木や鉄、石、コンクリートなどを使ってする工事」のことである。⑤「火花」は上下の字を入れかえると、「花火」というべつのことばができる。「先手」と「手先」など、ほかにたくさんあるので、自分でも考えてみよう。

② 1 あわててイをえらばないようにしよう。はちみつがおいしいことは知っているが、ここではまだたべていないので「おいしかった」とはいえない。

2 まだはちがやってきておらず、子熊しかいないので、「ひとりごと」になる。

3 「ゆびでしゃくって、ちびちびなめはじめました」と書かれており、子熊も「はちみつにかぎる。あまくって、おいしくって」としゃべっているの、アにしたくなる。だが、「みつばちはらを立てている」リゆうをこたえることに注意しよう。みつばちのことばを手がかりにしなければならぬ。そうすると、みつばちが「べろべろ」と、見ているうちになめちまう」といつている。子熊としては「ちびちび」でも、みつばちからすると「べろべろ」なのである。おまけに、子熊は、「何がはらがたつんだ」とみつばちにたずねるときも、「みつをたべながら」たずねていた。

4 「いいところ」ということばが出てきたときに、「どこだろう」とおもいながら読み進めていくと、すぐ場所をあらわすことばが出てくる。

5 子熊にみつをあつというまにたべられてしまったみつばちにとって「いいところ」なのである。花もきれいだろうし、だれもいなくてしずかなのはあろうけれど、そこがだいじなのではない。

6 アについて、子熊はみつばちのことばをきいて「気の毒なような気持ち」になっているのだから、「大げんかをした」とはいえない。イについて、子熊がしたのは、「いいところ」につれていってあげることだけである。

③ もののようすをあらわす擬態語の問題である。今回は「○っ○り」の形になっていて、しかも二つめの○に入るのが「ば行」の音のものと、「か」になっているものを出題した。

ア 「きつぱり」は、はつきりした態度をとるときに使われる。

イ 「たつぷり」は、十分にあらわすをあらわす。

ウ 「さつぱり」には、さわやかなようす、あつさりしているようす、何も残さないようすなど、いろいろな意味がある。また、「まったく（くない）」という意味でも使われる。

エ 「うっかり」は、ぼんやりして失敗してしまうようすをあらわす。

オ 「しつかり」は、考え方がたしかで、信頼できるようすをあらわす。

カ 「すつかり」は、完全にかわってしまいうようすをあらわす。

④ 1 漢字で書く「有害」「有益」となる。「ゆうがい」の「がい」は「がい虫」なので、「ゆうえきな虫、鳥、さかなも」のところで、これは「がい虫」のはんたいではないかと見当がつけられたかもしれない。ことばの意味は、文章の中でつかんでいくのが理想である。

2 ②は、「かんたんにとりのぞくことができます」といっておいて、「ぜんめつさせることはできません」と予想に反したことを述べているところである。④は、のうやくを使うとよくないという話のあとで、その解決策として「がい虫の敵を利用しよう」と提案しているところである。

3 「どのようなかうがい」をこたえるのだから、「こうがい」ということばを見落とさないようにしよう。すぐ前に「かんなきようおせん」という、ひとつの大きな、おそろしいこうがい」と書かれている。

4 「どのような方法が」の部分と、「なぜあぶないのですか」の部分の、どちらにも正しくこたえているものをえらばなければならぬ。「そのような、あぶない方法」の反対が、「がい虫の敵を利用」する方法なので、「そのような、あぶない方法」は「のうやくを使う方法」である。しかし、イの「がい虫を殺すので」はおかしい。「がい虫を殺」さなければのうやくとはいえない。

5 アについて、「自然をよごし、住めなくなるようにする」のは、「のうやく」である。イについて、「がい虫をぜんめつさせることはできません」と書かれていた。ウについては、文章のはじめに書かれていた。